OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『左氏会箋』の校勘の特色とその位置 : 『左伝注疏校勘記』との比較を中心に
Author(s)	金原, 泰介
Citation	中国研究集刊. 2017, 63, p. 162-187
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70151
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　果号（総六十三号）平成二十九年六月　一六二―一八七頁

『左氏会箋』の校勘の特色とその位置

――『左伝注疏校勘記』との比較を中心に―

金原泰介

序言

竹添進一郎（井井、一八四二～一九一七）の著作『左氏会箋』（以下、『会箋』と略称）は杜預『春秋経伝集解』の注釈書として知られている。明治三十六年（一九〇三）から同三十七年にかけて出版された『会箋』は、大正三年（一九一四）に日本学士院賞を受賞し、学界で高い評価を受けた。該書はまた、中国・台湾でも翻刻されており、日本人の漢学著作としては最も有名なものの一つである。そのため、既に二十数編の研究論文が日本・台湾・中国で発表されている(注1)。

『会箋』の学術的価値を考える上で重要なのは、該書の底本とそれに対する校勘であろう。『会箋』が底本とするのは、紅葉山文庫（江戸城内に設けられた将軍のための専用図書館）旧蔵、現在は宮内庁書陵部所蔵の旧鈔本『春秋経伝集解』である(注2)。この旧鈔本『集解』は、唐から伝来したものとされ、江戸・明治期においては容易に閲覧することのできない貴重なテキストであった(注3)。以下、この旧鈔本『集解』を「巻子本」と称する。学士院賞の審査評は『会箋』の校勘について次のように云う。

> 著者が特に請て之（巻子本）を底本とし、而して他の古原本と対照して一々其異同を挙げ、多く遺憾無きに至らしめたるは、学者に裨益を与ふること多大なり(注4)。

審査員の評価から、巻子本を底本とした緻密な校勘が高く評価されたことがわかる。その重要性から、『会箋』の校勘は該書の研究史におけるテーマの一つとなった。例えば林慶彰は『会箋』の校勘成果を検討・分類し[注5]、校勘の方法については、孫赫男が分類を行っている[注6]。また近年、竹内航治が『会箋』の稿本を調査し、初期の稿本における底本は巻子本ではなく、後に巻子本を底本として校勘が加えられたのではないか、と指摘している[注7]。

以上のように、『会箋』の校勘成果の内容、方法、校勘の具体的作業については明らかになりつつあると言ってよい。ただ、私見によれば、まだ考察の必要なテーマが存在する。

一般的に考えて、ある著作の独自性を考える場合、過去の重要著作と内容を比較した上でその特色、さらにはその特色の学術史的位置についての考察が基礎研究として行われる。しかしながら、『会箋』は中国八十八家百五部、日本十二家十二部と多くの著作を参照しているため[注8]、比較研究は順調に進んでいるとは言い難く[注9]、校勘に関しては、先行著作との詳細な比較研究は皆無である。そのため、学士院の高い評価にも関わらず、『会箋』の校勘の学術史的位置は必ずしも明確ではないように思われる。

また、林慶彰や孫赫男によれば、『会箋』は清朝考証学の影響下にあり、該書の校勘も清代学術と関連しているという[注10]。注目すべきなのは『会箋』自序において「阮氏元」の名が参考文献の著者として挙げられていることである[注11]。『会箋』以前に出版された、『左伝』の校勘に関する重要著作として、先ず挙げられるのは清代の阮元（一七六四～一八四九）主編『春秋左伝注疏校勘記』（以下、『左伝校勘記』と略称）であろう[注12]。嘉慶十一年（一八〇六）に出版された[注13]『十三経注疏校勘記』は清代校勘学最高の成果の一つであり、該書所収の『左伝校勘記』は現在においてもなお『左伝』研究の基礎文献の一つと言ってよい。しかし、『会箋』と『左伝校勘記』との比較研究はこれまで行われていないのが現状である。

『会箋』と『左伝校勘記』の関連性を考える上で重要なのは、島田翰（一八七九～一九一五）の存在である。上野賢知は『会箋』の校勘について、翰が多大な関与をしたと指摘し、「左氏会箋の考勘学的方面の調査研究は一切島田翰氏が担当したものと見て誤はない様である」と云う[注14]。上野氏の指摘を考慮すると、『会箋』の校勘を考える上で翰の存在を看過することはできない。

また、翰はその著作『古文旧書考』において清代校勘学の代表著作として『十三経注疏校勘記』の名を挙げており[注15]、ここで島田翰・『会箋』・『校勘記』がいかに関わり合うのか、という問題が注意を惹く。

以上の問題意識に従い、以下、本稿では『会箋』と『左伝校勘記』との比較検討を行い、両書の関連性、『会箋』の校勘の特色、およびその学術史的位置などの基礎的な問題について、島田翰に注目しつつ卑見を述べてみたい。なお、本稿における『会箋』からの引用の底本には、明治講学会本を用いる[注16]。また、本稿所引の『十三経注疏校勘記』の底本としては『皇清経解』所収本を用いることとする。

一、『会箋』校勘札記と『左伝校勘記』

『会箋』には校勘に関する記述が散見する。その大部分は巻子本と校本との相違点を述べただけの簡単なものであるが、校本や古籍に見える異文、あるいは字句の誤脱について、何らかの判断を下した箇所も少なくない。筆者は『会箋』に対して調査を行い、該書全三十巻中に合計百九十四条に及ぶ校勘に関する考察が存在することを確認した。こうした何らかの判断を下す箇所を、本稿では「校勘札記」（以下「札記」と略称）と呼ぶこととする。校勘においては、単に校本との相違を列挙するよりも、相違の意味するところについて判断を下すことの方が難しく、それゆえ著者の学識が反映することは論を俟たない。そこで以下においては、札記を中心に考察を進める。

さて、筆者の調査によれば、『会箋』中に『校勘記』の書名が出てくるのは実は一箇所だけであり[注17]、阮元の名前が出るのも二箇所に過ぎない[注18]。表面上は『会箋』と『左伝校勘記』はほとんど接点が無いように見えるが、両者は決して無関係ではなく、比較検討すると、札記の少なからぬ部分が次のように分類できる。

（一）『左伝校勘記』の利用

札記は『校勘記』の内容をほぼ引用同然に利用するものの出典を明示しないことがある。こうした箇所は計二十三条存在する。例えば、隠公元年の伝を巻子本は、「姜出而賦。大隧之外、其楽也泄泄」と作る。この伝文について、札記は次のように云う。

「泄泄」、石経避太宗諱、改作「洩洩」。宋以後本、皆仍唐刻。（隠公第一、十五葉左）

同じ伝文について、『左伝校勘記』の底本は、「泄泄」

を「洩洩」に作る(注19)。『校勘記』は次のように云う。

案「洩洩」当作「泄泄」。……石経避太宗諱改、宋以後本、皆仍唐刻。」（巻九百五十、九葉右）

『会箋』と『左伝校勘記』の傍線部とを比較してみればわかるように内容、用字が共通しており、一見して札記が『校勘記』を参考にしたことがわかる(注20)。

（二）『左伝校勘記』の資料・論拠・考察を補足する

また、札記は『左伝校勘記』を利用する際に補足を行うことがあり、この補足には二種類ある。

先ず『会箋』は、論点や結論が『校勘記』と同じであっても、中間の論証において資料や論拠を補充する場合があり、こうした例は計二十六条存する。例えば、「莫敖縊于荒谷」（桓公十三年伝文）の「荒」字について『経典釈文』が異文を挙げており、これについて『左伝校勘記』は次のように云う。

『釈文』云、「『荒』本或作『**𠀋**』。」陳樹華云、「案『説文』当作『**𠀋**』。……」案「**𠀋**」当是古本古字、後人改之。（巻九百五十五、六葉右）

『左伝校勘記』は先ず陳樹華（生卒年未詳）の説を引く。陳氏は、『説文解字』に従えば「荒」字は「**𠀋**」字の誤りである、と考える。この説は『説文』の「**𠀋**」字の項目に、『易』泰卦九二の爻辞を引用して、「包**𠀋**、用馮河」とあることにもとづく(注21)。現行の『易』のテキストでは「**𠀋**」を「荒」に作るが(注22)、陳氏は『説文』所引の爻辞を根拠に「**𠀋**」字が正しいと考えたのである。『左伝校勘記』は如上の陳樹華の説を参考とし、「**𠀋**」字は「荒」字の古字であると云う。

対して札記は『釈文』について次のように云う。

『釈文』云、「『荒』本或作『**𠀋**』。音同。『説文』「**𠀋**」下引『易』：「包**𠀋**、用馮河。」『易・泰卦・釈文』、「『荒』本亦作『**𠀋**』。」『詩・閟宮・釈文』、「『遂荒』、韓詩作『**𠀋**』。」「**𠀋**」当是古本古字。（桓公第二、四十三葉右）

傍線部は『左伝校勘記』と共通する箇所を示す。札記も『説文』に依拠して「**𠀋**」字は「荒」の古字であると指摘しており、論点・論証・結論は『左伝校勘記』と共通する。ただし、『校勘記』と比較すると『説文』を具体的に引用し、さらに『易』・『詩』の『釈文』を傍証として挙げている点が異なる。『会箋』は『左伝校勘記』の論拠を補足していると言ってよい。

また、校勘においては、校勘資料（校本、古籍中の引用文等）に異文が見える場合、底本と資料のどちらの字句が正しいのか、あるいは、両者の関係性（本字と通仮

字、あるいは正字と俗字など）について考察する必要が生じる。しかし、『左伝校勘記』は常に如上の問題について検討するとは限らない。その場合、札記には『左伝校勘記』を補足するかのように考察を行う例が計三十一条見える。

例えば「楚人救衛、不克。公懼於晉、殺子叢以説焉。謂楚人曰：不卒戍也」（僖公二十八年伝文）[注23]について、『左伝校勘記』は、「曰」字の無いテキストの存在を簡単に指摘するだけであるが[注24]、札記は杜預注との整合性を考えて「曰」字は不必要であると見做している[注25]。

（三）『左伝校勘記』への反駁

校勘においては、異文をどのように判断するのか、という問題について、学者同士で意見が対立することがある。札記と『左伝校勘記』の間にも同様の現象が計二十五条に見える。特記すべきなのはこの反駁においては、『左伝校勘記』の所説に従えば巻子本の字句に問題が存するとされる場合、札記は『校勘記』と異なる考証を提示し、概ね（計二十五条の内、二十二条）巻子本の字句を支持していることである。

注意すべきなのは、巻子本の字句を支持する札記の内容には、妥当とはいえないものも存在することである。例えば、哀公十四年の杜預注所掲の人名を巻子本は、「子芒盈」（哀下第三十、三葉左）に作る。『左伝校勘記』は「子芒盈」と作るテキストについて、

宋本・岳本・纂圖本・毛本は「芒子盈」に作る。山井鼎云ふ、「或いは『子芒盈』に作るは非なり。」（巻九百八十四、五葉左）

と云う。『校勘記』所引の山井鼎の説は、『七経孟子考文補遺』に見えるもので[注26]、山井は特に根拠を明示せずに「子芒盈」は誤りであると断定している。ただ『校勘記』によれば、宋本などの四種のテキストが「芒子盈」に作るという。これは複数のテキストが「芒子盈」に作ることを示すことにより『考文』の説を補足しているのであろう。『校勘記』の観点に従えば、巻子本の字句は誤りである。

対して札記は『校勘記』と異なり、「芒子盈」を否定し、次のように云う。

注に「子芒盈」といふ。宋本「芒子盈」に作るは、非なり。世家の『索隠』は巻子本と合す。（哀下第三十、四葉右）

所謂「世家」は『史記』斉太公世家を指す[注27]。『会箋』は宋本所掲の「芒子盈」を否定し、巻子本に見える

「子芒盈」が『史記索隠』所掲のものと合致することを指摘する。『校勘記』・『会箋』ともに「芒子盈」の異文として「子芒盈」の一種類のみを提示しており、従って、『会箋』が「芒子盈」を否定することは、事実上、「子芒盈」が正しいと見做していることに等しい。ただ、宋本を否定する『会箋』であるが、その論拠を明示しておらず、また、『索隠』所掲の人名が正しいということについての考察も無い。『会箋』は、実のところ恣意的に巻子本と異なる字句を否定しているに過ぎないのである。

以上、本節では『会箋』校勘札記と『左伝校勘記』とを比較検討した。筆者の観点に従えば、札記計百九十四条の内、『左伝校勘記』と関連する箇所は計百五条存し、半数以上を占める。『会箋』の校勘において『校勘記』は重要な参考著作であり、札記は、「『校勘記』に対する補正」とも言うべき性格を有すると言えよう。

また『会箋』と『左伝校勘記』との間に校勘上の意見の対立が存在する場合、前者には巻子本の字句を支持する傾向があることが確認された。『会箋』は貴重な巻子本を底本としており、その価値を明示するために同テキストを支持するのは不自然ではないように思われる。ただ、札記全体を調査してみると、巻子本支持の傾向は、異なる様相を見せる。筆者の調査によれば計百九十四条の内、巻子本の字句を支持する札記は合計九十一条存する。対して、巻子本の字句に何かしらの問題を指摘する札記は、計七十三条確認された。一見してわかるように、札記全体から見れば、巻子本の字句を支持する傾向はそれほど明確ではない。しかしながら、上述の「『校勘記』に対する反駁」においては、計二十五条の内、二十二条において巻子本の字句を支持し、また、巻子本以外に見える異文を恣意的に否定するなど、明らかな偏向性が存在する。このことは特徴的であり、『校勘記』への反駁には、該書をめぐる特定の背景があることを想像させる。

二、『会箋』自序と『十三経注疏校勘記』凡例

私見では、札記の反駁には、旧鈔本に対する評価が関係している。前述のように、巻子本『春秋経伝集解』も旧鈔本に属する。

『会箋』と『左伝校勘記』の旧鈔本評価を知る上で重要なのは『会箋』の自序と『十三経注疏校勘記』の凡例である。『左伝校勘記』は『十三経注疏校勘記』の一部分であり、かつ凡例は著作の体例・方針を示すものであ

るから、該書の校勘方針を知る上でも、その内容は重要である。『十三経注疏校勘記』には、全九条の凡例が総目の後に置かれており、その第六条に日本の旧鈔本についての見解が表明されている。

日本の旧鈔本と『十三経注疏校勘記』とは一見、無関係なようであるが、実は該書は多く旧鈔本を参照している。というのは、『校勘記』は日本人の校勘著作である山井鼎・荻生観『七経孟子考文補遺』（以下、『考文』と略称）の成果をしばしば利用するからである(注28)。『考文』は足利学校所蔵の旧鈔本に注目し、これらを「古本」と称し、校本として多用した(注29)。山井が該書を編纂したとき、「古本」は荻生双松（徂徠、一六六六～一七二八）が、「唐以前の王（王仁）・段（段楊爾）・吉備（吉備真備）の諸氏の齎来する所」(注30)と述べるように、唐代以前の貴重なテキストと見做されていたのである(注31)。結果として『十三経注疏校勘記』は『考文』を通じて旧鈔本を多く参照し、「古本」という字句が『校勘記』に散見することとなった。

さて、『会箋』自序と『十三経注疏校勘記』凡例とを比較すると、旧鈔本への評価が大きく異なることに気づく。以下に述べるように、その相違点は二種類に分類できる。

（一）旧鈔本中の虚字について

『会箋』は自序の後記において、巻子本の杜預注には大量の「之也」・「也矣」等の虚字が付加されていることを指摘する。

> 注中、「之也」・「矣也」・「也矣」の類、極めて多し。『詩』小雅四月篇の「六月徂暑」の毛伝に、「六月火星中、暑盛而往矣」といふ。旧鈔巻子本『玉燭宝典』に引きて、「矣」の下に「也」字有り。……その他、唐鈔楊雄伝注・金沢文庫巻子本『文選注』、皆な多く語辞有り。蓋し先儒の伝注の体は、毎（つね）に句絶の処に於て乃ち語辞を用ひて、以て意義の深浅軽重を明かにす。しかして後人察せず、視て繁蕪と為し、刻書の漸く行はるるに及び、工多く費鉅きを憂へ、是に於て務めて語辞を芟（か）りて、以て其の工を省き、しかして古意、地を掃ふ。（四葉左～五葉右）

竹添によれば、『玉燭宝典』などの旧鈔本には、現行のテキストには無い、多くの虚字が見られる。こうした虚字は注釈者が注に込めた意味の軽重を示すものであるが、刻書費用の増加を嫌った後人により削除されたという。この観点に従うならば、虚字が多く見えることは、巻子本が杜預注の原初の形態を留めているという重要な証拠となる。そのため竹添はこれらの虚字に重要性を認

め、明治講学会本『会箋』には、校本と比較して多い虚字には圏点を付けて明示している。虚字に価値を認めて強調する校勘は、『会箋』の特色の一つである。

他方、『十三経注疏校勘記』における此等の虚字に対する評価は良いものではない。『校勘記』は凡例で、

更に句中に虚字を増加するを喜ぶは、尤も古義を失ふ。（巻八百七、三葉右）

と批判し、旧鈔本の虚字は故意に増字されたものと見做す。また『尚書注疏校勘記』には、句末の虚字が後代に増加されたことの証拠として、顔之推『顔氏家訓』の文を挙げる。

案ずるに古本の句末に「也」字有る者甚だ多く、勝げて載すべからず。『顔子家訓』書証篇に曰く、「『也』は是れ語已(注32)及び助句の辞にして、河北の経伝は悉く此の字を略するも、無かるべからざる者有り。『伯也執殳』・『於旅也語』の類の如きは、儻し此の文を削れば、頗る廃闕を成す。又た俗学有り、経伝中に時に『也』字を須ふるを聞き、輒ち意を以てこれを加へ、毎に所を得ず。益〻誠に笑ふべし。」是れ此の字は已に後人の意に任せて増損するを経れば、今悉くは校せず。（巻八百一十九、二葉右）

顔之推は学徒が「也」字を必要以上に増減することを批判している。『尚書注疏校勘記』は顔氏の文から旧鈔本の虚字も後人により随意に増加されたものであると考え、それゆえ一つ一つ校勘する必要はない、と価値を低く見積もる。要するに、『十三経注疏校勘記』にとって旧鈔本の虚字は一種の衍字に過ぎないのである。

（二）旧鈔本の資料価値について

『会箋』と『十三経注疏校勘記』とでは、旧鈔本の資料価値についての観点も異なる。『会箋』自序は巻子本を、「隋唐の遺経」（一葉右）、「絶世の宝」（二葉右）であると絶賛し、その他の旧鈔本についても、「当時の音博士、隋唐の真本に仍りて点を施し、……真本の面目は絲毫も改めず」（二葉右）と述べて高く評価する。

また、巻子本については、「試みに宋本を以て対校するに、文字の異同少歩からずして、印本の脱誤、此れに頼りて補正すべき者、極めて多し」（二葉右）と自序に云う。巻子本と宋本の間には字句の相違が多く見られるが、こうした異文は、『会箋』にとって、宋本以上に価値がある校勘資料であった。

他方、『校勘記』においては、旧鈔本は必ずしも信頼性の高い資料ではなく、批判の対象となることさえある。

（1）按ずるに古本は多く信ずべからず。（『周易注疏校勘記』、巻八百七、十葉左）

（2）厳杰云ふ、「『考文』に云ふ所の『古本』は多く拠るに足らず。」（『礼記注疏校勘記』、巻八百九十七、六葉右）

では、なぜ『校勘記』は旧鈔本の資料価値を認めないのだろうか。『校勘記』の凡例は、古本を批判して次のように云う。

其の所謂「古本」は又た多く『釈文』・『正義』の中より攙摭（あつ）め、亦た仍ほ錯誤を免れず。（巻八百七、二葉左～三葉右）

すなわち、『考文』所引の旧鈔本は『経典釈文』や『五経正義』中に見える異文を抜き書きしたものに過ぎず、それらの異文の誤りをも踏襲していると見做されるのである(注33)。

では、『十三経注疏校勘記』の旧鈔本に対する不信感は妥当なものだろうか。先ず足利学校には実際に多くの旧鈔本が所蔵されており(注34)、それらが『正義』・『釈文』・類書からの抜き書きではないのは明らかである。清朝の学者は足利学校所蔵の旧鈔本を実際に調査する機会が無いのであるから、その資料価値について判断が慎重になるのは当然である。しかし、実見しての調査もなく抜き書きと決めつけるのであれば、そこにある種の先入観の存在を認めざるを得ない。日本に伝存するテキストに対して、清朝の学者は根拠薄弱な批判を古本以外に対しても行っている。梁の皇侃の『論語義疏』が清朝に伝わり『四庫全書』に収められたことはよく知られている。藤塚鄰によると、『論語義疏』について一部の清儒は、「日本を軽視する所から」偽書であると批判したという(注35)。『校勘記』における旧鈔本批判も、『義疏』に対する批判同様、偏見に由来するものであろう。

以上の比較を通して、『十三経注疏校勘記』と『会箋』の旧鈔本評価は対立することがわかった。では、この対立は『会箋』の校勘とどのように関わるのだろうか。ここで注目されるのは、校勘の実質的な担当者と目される島田翰の旧鈔本評価である。陳狆によれば、『会箋』自序の内容は島田翰の著作『古文旧書考』の「文章を切り貼りして再構成したもの」であるという(注36)。事実、翰の旧鈔本評価は『会箋』自序と多く重なっている。翰は旧鈔本の虚字は注釈の原初の形態を示すものとして重視し(注37)、かつ、旧鈔本の校勘価値を高く評価している(注38)。要するに翰の旧鈔本評価は『会箋』自序と同じく、『校勘記』と対立するものだったのである。

また、島田翰には『校勘記』の旧鈔本批判を意識したと見られる発言があることも重要である。翰は『古文旧書考』において、『考文』所引の古本が旧鈔本に対する清朝人の批判を惹起したとして、次のように述べている。

『七経孟子攷文』の出づるや、清人、其の載する所の槧本信ずべく、鈔本疑ふべきを議す。彼夫の『攷文』を製する者は、足利学所蔵の鈔本の多く宋元の刻本に出づるを知らず、遂に有識の士をして其の旧本に出づる者をも併せて疑はしむ、亦た憾むべからずや。（巻一、十四葉左）

翰は、清代の学者が旧鈔本の信頼性に疑問を抱いていることに言及し、『考文』所引の旧鈔本の中には宋元刊本を抄写したテキストも存するからだ、と弁護している。翰は『古文旧書考』において、清代校勘学の代表著作として盧文弨（一七一七～一七九五）の『群書拾補』と並べて『十三経注疏校勘記』の名を挙げており、翰の所謂「清人」には盧・阮の二書が意識されていると考えられる(注39)。ただ『群書拾補』にも『考文』所引の旧鈔本は多く引用されているが、盧文弨は、「此に所謂『古本』は乃ち未だ『正義』有らざる以前の本なり」（周易注疏、十三葉右）(注40)と述べて、その資料価値を認めており、該書の旧鈔本に対する態度は『校勘記』と異なる。従って上の『古文旧書考』からの引用文は、翰が『校勘記』の旧鈔本批判を意識しつつ、清朝の学者に対し擁護の立場を取ったことを示すものと考えられよう。

上に述べた島田翰の立場を考慮すると、札記における『左伝校勘記』への反駁の意味が明確になる。すなわち、『校勘記』の内容が旧鈔本である巻子本の字句に否定的な場合、旧鈔本評価において『校勘記』と対立する島田翰は、可能な限り巻子本の価値を擁護しようとしたと推察される。その結果、反駁に関する札記の大部分が巻子本の字句を支持する内容となった。また、巻子本擁護を前提とするため無理が生ずることもあり、そのため前節で見たような恣意的な反駁も行われたと考えられる。要するに、札記における『左伝注疏校勘記』への反駁は、実は旧鈔本批判に対する擁護をも含意すると解釈できるのである。

三、島田翰と海保元備

次いで島田翰の学統に注目して、更に別な角度から『十三経注疏校勘記』と『会箋』との対立の背景について考えてみたい。

島田翰の父重礼（篁村、一八三八～一八九八）が海保

元備（漁村、一七九八～一八六六）の弟子であったことはよく知られている。注目されるのは、海保に『周易校勘記挙正』という著作があることである。該書は、「阮元校勘記の補正を試みた早い時期のもの」[注41]という評されているように、『会箋』の札記同様の性格を有する。かつ、島田翰は『古文旧書考』中において該書を引用しており、ここで翰の校勘学と海保との関連性が興味を惹く。

（一）島田翰の校勘学

先ず島田翰の校勘学がどのようなものであったかを検討してみよう。翰は一般的には書誌学の古典の一つである『古文旧書考』の著者として知られている。注意しなければならないのは、その書誌学研究が古籍に対する実際の校勘と並行して行われたことである。『古文旧書考』の成立について翰は次のように云う。

> 藁を己亥（一八九九）の冬に起し、今茲（ここ）に癸卯（一九〇三）に至り、五たび年を閲するを越へて、始めて克（よ）く『古文旧書考』及び『群書点勘』の二書を成す。其の専ら鈔刻の源委を参辨し旧志の謬伝を匡訂するを以て体と為す者、凡そ六輯、『古文旧書考』と曰ふ。……其の旧本の異同を点勘し今本の乖異を参覈するに出づる者、一十六巻、経に起りて集に終ふ。名づけて『群書点勘』と曰ふ。（巻一、一葉右～二葉右）

『古文旧書考』と『群書点勘』は五年間の古書研究の成果として書かれ、前者は版本の系統研究や従来の書誌学の訂正等の成果であり、後者は古籍に対する校勘の成果であるという。引用文から、『古文旧書考』が実は校勘著作である『群書点勘』と対になる著作であることがわかる。翰は『古文旧書考』について、「是の書の作（おこ）るは、蓋し後人をして古文旧書の貴ばざるべからざること、校讐点勘の忽（ゆるが）せにすべからざることを知らしむるに在り」（『古文旧書考』、巻一、三葉左）と述べており、校勘学の重要性を論ずるのも該書の著作目的の一つであった。翰にとって校勘学は書誌学と不可分の関係にあったのである。

残念なことに『群書点勘』が出版されることはなく、該書は現在見ることが出来ない。しかし島田翰はその内容について簡単に紹介しており、そこから翰の校勘学の傾向が推察できる。『群書点勘』について翰は『古文旧書考』で次のように云う。

> 其の体は阮氏『校勘記』・盧氏『群書拾補』の間に出入して、本を採ることは則ちこれに倍加す。其の

異同を点勘するや、これを経術に本づきて以て精粗を究め、これを類書史伝に験じて以て当否を考へ、又たこれを広むるに先正の議論を以てし、しかして其の得失を論ず。（巻一、二葉右）

「其体出入於阮氏『校勘記』・盧氏『群書拾補』之間」という字句から、『群書点勘』が『十三経注疏校勘記』を参考にした著作であることがわかる。一方で翰は「広之以先正之議論、而論其得失」と述べており、翰の校勘が過去の学者の校勘業績を参考にしつつも、それらに対して批判や修正を行うものであったことが窺える。恐らく『群書点勘』においては『校勘記』の内容に対しても何らかの補正が行われたであろうと考えられる。

（二）海保元備『周易校勘記挙正』の特徴

次いで海保元備の校勘学を検討してみよう。注意しなければならないのは、海保の校勘学も先人の業績に対して批判的なものだったことである。

海保は嘉永三年（一八五〇）に『周易正義』の単疏本の旧鈔本を入手し(注42)、それを利用して阮元主編『周易注疏校勘記』（以下、『周易校勘記』と略称）に対して補正作業を行った。その成果が『周易校勘記挙正』（以下、『挙正』と略称）である(注43)。

書名から推察できるように、『挙正』には『周易校勘記』に対する反駁が多く見られる。筆者の調査によれば、海保が『周易校勘記』に対して提起した反駁は計三十一条存在する。例えば、海保は該書所引の孫志祖（一七三七～一八〇一）の説に対して次のように述べている（【　】内は単疏本の字句を示す）。

【則徳之不大】今本同じ。孫志祖云ふ、「『之』字、疑ふらくは衍なり。」文義を按ずるに、孫説は是に非ず。（四七九頁）

「之」字を衍字と考える孫氏に対して、文章の意味から考えて「之」字があったほうが良いと海保は指摘する。ただ海保は「文義」の内容が明示しない上に、その「文義」が「之」字の有無によりどのように左右されるのか、という重要な点についても明らかにしてない。海保の校勘については既に「流於武断（恣意的な傾向がある）」との指摘が為されており(注44)、そうした傾向が上の校勘にも反映されていると言えよう。

注目すべきなのは、『周易校勘記』への反駁、計三十一条の内、三十条が単疏本の字句を支持する立場から書かれており、明らかな偏向性が見られることである。例えば、『校勘記』があるテキストの字句を正しいと見做し、その字句が単疏本と異なる場合には、『挙正』は次

のように云う。

【今有不従】『校勘記』に云ふ、「銭本に、『今』を『令』に作る。是なり。」按ずるに、「今」字は悞(あやま)らず、銭本は是に非ず。（四七一頁）

海保は根拠を示さずに単疏本を擁護しており、ここでも上に示したような恣意的な校勘が確認できる。

『周易校勘記』に対する反駁の背景については、『挙正』の序文が参考となる。海保は序文において、自らの発見した『周易正義』の単疏本について次のように云う。

蓋し是(こ)の本無くんば、則ち『校勘記』の作(おこ)るは、吾、其の已むを得ざるを知るなり。是の本有れば、『校勘記』は復た作らざるべし。遂に其の字句の大なる者を条挙して、以て是の本の卓然として拠るべきを示し、名づけて『周易校勘記挙正』と曰ふ。（四六六頁）

海保は単疏本の価値について、このテキストがあれば『校勘記』は不必要であり、そこで、単疏本に見える校勘上重要な字句を列挙してその依拠すべきテキストであることを示したという云う。海保の序文から、『挙正』の著作意図が窺える。該書は単疏本が『周易校勘記』以上に重要な校勘資料であることを示すことを意図していたのである。『挙正』が『校勘記』に反駁して旧鈔本を支持するのは、実は如上の立場を反映している。

また、前節で述べたように、『十三経注疏校勘記』は足利学校所蔵の旧鈔本に批判的であることが注目される。『周易校勘記』も同様であり、「按ずるに古本は多く信ずべからず」（巻八百七、十葉左）、「『考文』の古本を引くは多く拠るに足らざるを知るべし」（巻八百八、一葉左）と述べて不信を表明している。海保は『挙正』を著すために『周易校勘記』を精査しているはずであり、当然、『校勘記』の旧鈔本に対する不信を知っていたに違いない。であれば、『周易校勘記』に対する反駁には、旧鈔本擁護という意味も有したと考えられる。また、『挙正』の校勘に見える旧鈔本支持という偏向性や恣意的な傾向は、海保が『校勘記』に反発し、旧鈔本擁護のために無理な反駁を行った結果と解釈できよう。

（三）『挙正』と島田翰

島田翰は『古文旧書考』において、貞和三年（一三四七）に抄写された単疏本『周易正義』について論じており、その際に海保の『挙正』を冒頭で全文引用している(注45)。

注意しなければならないのは、海保の利用した旧鈔本が貞和年間のものではないことである。翰は海保が参照

したのは大永年間（一五二一～一五二八）の鈔本であると指摘するものの[注46]、特に貞和の鈔本と比較することもしておらず、二つの鈔本の関係性についての考察もしていない。実のところ、貞和の旧鈔本の価値を理解する上で、『挙正』を引用する意味は無いのである。それにも関わらず翰が『挙正』を引用したのは、なぜだろうか。

翰は『古文旧書考』で、「旧鈔本を貴ぶべき所以の者は、其の善本に原づき、以て今本の訛奪を訂補すべきを以てなり」（巻一、十四葉右）と述べており、旧鈔本の重要性は、今本を訂正できる善本であること、換言すれば校勘資料としての高い価値に存すると考えていた。前述のように、海保の『挙正』は旧鈔本である単疏本が重要な校勘資料であることを示すことを目的とする。おそらく翰は『挙正』を巻頭に掲げることにより、『校勘記』を修正できる善本として、旧鈔本の価値を具体的に示そうとしたのであろう。また前節で示したように、翰は『十三経注疏校勘記』の旧鈔本批判に対して擁護の姿勢を取っていた。こうした姿勢は海保と共通するのであり、『挙正』を掲げることによって自らの立場を示したものと考えられる。

海保の死後、その著書は弟子である島田重礼に寄贈され、翰はそれらを自由に閲覧できたという[注47]。翰は海保の学識について「博覧強識なること、近古に匹するもの罕なり」と絶賛し[注48]、その著作を「精審にして伝ふべし」と称揚する一方で、海保の著作が伝播していない現状を指摘している[注49]。『古文旧書考』における『挙正』の引用は、また、海保の校勘学を学界に知らせて称揚することも意図していたと考えられよう。

以上から、島田翰の校勘学は海保から強い影響を受けたことがわかる。注意しなければならないのは、「『校勘記』の補正」・「旧鈔本の校勘資料としての価値に対する高評価」・「『校勘記』に反駁して、旧鈔本の字句を支持する偏向性」・「旧鈔本批判に対する擁護」など、『挙正』と『会箋』の校勘との間に共通点が見えることである。これについては、翰の校勘学には海保から継承したものがあり、その結果、翰が協力した『会箋』に海保の校勘学の傾向が反映されたと考えられよう。

四、海保元備以前の『十三経注疏校勘記』受容

『校勘記』に対する補正や反駁は、実は海保元備や島田翰に始まるわけではなく、両者以前にも見られる。私見では、『会箋』の校勘の学術史的位置を正確に捉える

には、海保以前にどのような学徒が『校勘記』を受容したのか、ということも検討し、その上で翰の学問の位置を考える必要がある。

（一）近藤重藏

先ず、『十三経注疏校勘記』を日本で最初に学術的に利用したのは誰か、という点について考えてみよう。江戸時代、将軍専用の図書館である紅葉山文庫には清朝の最新の学術成果がもたらされ、文庫の管理者である書物奉行はそうした成果を利用できる立場にあった。近藤重藏（正斎、一七七一～一八二九）は文化五年（一八〇八）から文政二年（一八一九）まで書物奉行を務め、その在任期間中に『校勘記』が日本に輸入されている(注50)。『校勘記』の最初の出版は一八〇六年であるから、おそらく近藤は日本で最も早く該書を読むことが出来た学者の一人である。

『校勘記』に触れた近藤の態度は、当時の学者の反応を知る上で興味深い。近藤は著作中において、「近日校経ノ精善ニシテ引拠衆本ノ多キハ〔十三経校勘記〕ニ若クハナシ」(注51)と述べて『校勘記』の価値を絶賛するのみならず、該書に見える書誌学的問題（儒家経典における経・注・疏の合刻時期）に関して、日本国内の資料を利用して自説を提出している(注52)。また、近藤は『校勘記』に匹敵する著作を企画し、日本国内の旧鈔本や宋本などを利用し、『五経定本』を作成することを幕府に建議している。この建議は、作成した『定本』の清朝への輸出をも視野に入れたもので、阮元主編『校勘記』を意識したものであった(注53)。なお、近藤が旧鈔本を利用しようとしたのは、「皇朝ノ古本ハ其源隋唐ヨリ伝フ。故ニ字句ノ精善ナルコト宋本ノ上ニ出ルモ少ナカラズ」(注54)と述べているように、校勘資料として高い価値を認めるからである。

如上の近藤の態度から、『校勘記』が輸入されて直ちに学者の注目するところとなり、その内容に日本の資料を利用して補正が加えられたことが窺える。換言すれば、『校勘記』は日本の校勘学・書誌学に学問的刺激を与える存在だったのである。

ただ管見では、近藤が具体的な校勘作業において『十三経注疏校勘記』を利用したことは無いようである。

（二）狩谷望之

『十三経注疏校勘記』を実際の校勘に利用したのは、近藤の友人である狩谷望之（棭斎、一七七五～一八三五）、及び彼と親しい学者に始まる。狩谷は『爾雅注疏』

の校勘において阮元主編『爾雅注疏校勘記』を利用した(注55)。狩谷の友人岡本保孝（況斎、一七九七～一八七八）も『淮南子』の校勘に『礼記注疏校勘記』を利用したり、『左伝校勘記』中の記述に補正を試みたりしている(注56)。

狩谷はおそらく近藤を通じて『校勘記』についての情報を得たであろう。狩谷は清朝考証学に早くから注目し、道光九年（一八二九）に『皇清経解』が出版されると(注57)、その五年後には友人と共同購入しようとするなど(注58)、最新の学術成果を積極的に吸収する学者であった。ただ注意しなければいけないのは、近藤を通じて情報を得たからといって、狩谷の学識が近藤に劣るわけではないことである。

近藤の学術活動において、狩谷望之は重要な共同研究者であった。川瀬一馬は、近藤の『右文故事』中の足利学校関連研究について、「狩谷の学識に負ふ所が頗る多大」と云う(注59)。また、近藤は貴重な金沢文庫旧蔵旧鈔本『群書治要』を紅葉山文庫から借り出して、刊本との対校を、狩谷とその友人市野光彦（迷庵、一七六五～一八二六）に依頼している(注60)。これらの例は、狩谷の学問水準がむしろ近藤以上であり、近藤の狩谷への学問的信頼が厚いことを示している。

近藤が狩谷を頼るのには理由があった。というのは、狩谷は同時代の考証学者達の指導者的存在だったのである(注61)。さらに狩谷が校勘学者・書誌学者として卓越した学力・見識を有していたことも重要である。明治に来日した楊守敬（一八三九～一九一五）は狩谷の著作『和名類聚抄箋註』を読み、狩谷の学力は顧広圻（一七七〇～一八三九）・盧文弨などの著名書誌学者・校勘学者に匹敵すると激賞した(注62)。また、書誌学者としても、狩谷は多くの善本を所蔵した。阿部隆一によれば、楊守敬の観海堂蔵本（現台湾故宮博物院所蔵）の逸品には、狩谷旧蔵のものが多いという(注63)。狩谷は旧鈔本収集にも力を入れ、日本所在の貴重漢籍の目録提要である森立之・渋江道純著『経籍訪古志』には、求古楼（狩谷の別号）所蔵の旧鈔本を少なからず著録する。

上記のような狩谷の指導的立場・学識を考えた場合、『十三経注疏校勘記』は日本に輸入されてから、先ず狩谷を中心とする学者グループにおいて受容・研究された、と言ってよいであろう。

ただ筆者が調査した限りでは、近藤・狩谷・市野・岡本などの学者は『校勘記』の古鈔本批判に言及しておらず、一見、彼らのグループは批判に無関心であったかのようである。しかし、次に示すように実は一部の学者が

問題視している。

（三）松崎復

江戸時代の学者の中で『校勘記』の古鈔本批判を取り上げたのは、おそらく松崎復（慊堂、一七七一～一八四四）に始まる。

松崎は狩谷望之の友人であり、狩谷から強い学問的影響を受けた。岡本保孝によると、松崎は狩谷の学問を慕い清朝考証学を学ぶようになったという(注64)。また、松崎は近藤重藏とも学術交流があり、近藤のために、紅葉山文庫所蔵旧鈔本の紹介文である「書楓山文庫古鈔本後」(注65)を代作している。交流関係から見て、松崎は明らかに狩谷のグループの一員である。

『校勘記』の古鈔本批判についての松崎の見解は、その著作『尚書考譌』に見える。松崎は唐の開成石経の校勘・刊行を畢生の事業としており、『縮刻唐石経』を天保十二年（一八四一）に完成させている(注66)。該書には校記である六篇の著作『周易校譌』・『尚書校譌』・『毛詩校譌』・『左氏経伝校譌』・『穀梁経伝校譌』・『公羊経伝校譌』が附された(注67)。

六篇の『考譌』においては、足利学校所蔵の旧鈔本が利用されており、その利用状況から松崎の旧鈔本評価を窺うことができる。『周易校譌』・『尚書校譌』・『毛詩校譌』中に「古本」という字句が計二十三条に見え(注68)、それらの「古本」の字句のほとんどが『考文』所掲の足利学校所蔵の旧鈔本「古本」と合致する(注69)。興味深いことに、二十三条の内、計十九条において松崎は、他の版本との比較において旧鈔本の字句が妥当である、あるいは、衍字や誤字ではないと見做せるような相応の根拠を有する、と判断している。換言すれば、松崎の校勘にも旧鈔本支持という偏向性が見られるのである。松崎は旧鈔本を「隋唐の佳本」であると見做し、その校勘資料としての価値を高く評価しており(注70)、こうした評価が偏向性として反映されたと考えられる。

では、こうした偏向性はなぜ生じたのだろうか。先ず注意したいのは、旧鈔本を高く評価する松崎に『十三経注疏校勘記』の批判的態度がどのように映ったのか、という点である。『校譌』には「阮元」という名が散見し、このことは、松崎が石経の校勘のために『校勘記』を精査したことを示している。従って、松崎は『校勘記』の旧鈔本批判を知悉していたはずである。松崎は『尚書考譌』において、『校勘記』所引の段玉裁説が旧鈔本の字句を「妄増」と疑っていることに対し、段説に反駁した上で、

段・阮の徒は、皇朝の古本を嫉媚み、毎に抑黜を加へ、其の善なる者も亦た強ひてこれを掩はんと欲するに至るは、篤論に非ざるなり。（四三二頁）

と擁護している。松崎にとって、旧鈔本に見える字句には妥当なものもあり、阮元・段玉裁による批判は理不尽なものであった。「毎加抑黜、至其善者亦欲強掩之」という字句から、松崎が『校勘記』に散見する旧鈔本批判に不満を抱き反発したことがわかる。こうした反発を考慮するならば、前述の旧鈔本支持という偏向性は、実は批判に対する擁護の姿勢を示すものと考えられよう。

（四）海保元備

海保元備と松崎復の間に、『校勘記』に対する反駁や古鈔本擁護という共通点が見えることは言を俟たない。では、この共通性は何を意味するのだろうか。

先ず注目されるのは、海保と狩谷望之のグループとの関連性である。長沢規矩也は日本書誌学の歴史を概観する中で、狩谷と交流のあった書誌学者を挙げ、そこに近藤・松崎・岡本・市野と並んで海保の名前が見える(注71)。

海保の書誌学は狩谷等の学問と密接に関連している。というのは、海保は『経籍訪古志』の成立に大きく貢献しているからである(注72)。渋江全善（抽斎、一八〇五～一八五八）・森立之（枳園、一八〇七～一八八五）による『訪古志』は旧鈔本・貴重刊本の解題として有名である。著者の一人である森立之は狩谷の弟子であり、森が、「この書の編録は狩谷棭斎の在日に端を発し、凡そ鈔刻の源委流別を辨ずるは、これを其の指授に得る者を多しと為す」(注73)と述べるように、『訪古志』はもともと狩谷の研究成果に由来するものであった。該書の編纂に大きく貢献した海保は、狩谷の書誌学の後継の一人と言ってよい。

また、海保は『訪古志』の序文において、狩谷の書誌学的見識や蔵書量を絶賛し、「鑑別尤も精」、「挿架も亦た極めて富む」と云う(注74)。このことから海保が狩谷の学問を知悉していたことがわかる。海保は旧鈔本の資料価値について、「具に隋唐の旧を存し、……宋元の古本の上に出づ」と絶賛する(注75)。こうした知見にも狩谷の学問から受け継いだ面があると推察される。

海保は明らかに狩谷を中心とする書誌学者グループに属するのであり、また松崎復の知人でもあった(注76)。両者には学問上の交流もあったと考えるのが自然である。海保・松崎における前述の共通性は、『校勘記』の旧鈔本批判に対する反発・擁護の姿勢がグループにおいて孤立したものではないことを示すのである。

（五）島田翰

既に述べたように、島田翰の校勘学は海保元備から影響を受けている。このことを考慮すると、翰の学問と狩谷のグループとの関連性が推察されよう。事実、翰の『古文旧書考』には、近藤重蔵・岡本保孝の書誌学に対する評価が見える(注77)。また、翰は狩谷望之とその友人市野光彦に私淑しており、『古文旧書考』の内容について、「未だ狩谷棭斎・市野迷庵の諸老先生の後塵を望むに足らず」と卑下するほどであった(注78)。

では翰はどのように狩谷等の学問に触れたのだろうか。注目されるのは翰の父重礼が海保元備を師とすることである。重礼は旧鈔本を、「天壌間無比の鴻宝」であると激賞し(注79)、さらに、「五経の古本を捜羅し、精しく其異同を校訂せば、斯学に裨益ある豈阮元校勘記の類ならんや」とまで云う(注80)。旧鈔本重視は狩谷等の書誌学に見られる傾向であり、旧鈔本による五経の校勘記の作成というアイデアは近藤重蔵の計画を想起させる。さらに、重礼は山井鼎以後、日本では校勘学が盛んではないと指摘し、数少ない校勘学者として吉田漢官（篁墩、一七四五～一七九八）・市野光彦・狩谷望之・海保元備・岡本保孝等五人の名前を挙げている(注81)。重礼の校勘学・書誌学的見識は明らかに狩谷等の学統に連なるものだと言えよう。

翰が二十歳の時に重礼は逝去し、遺命により以後、翰は竹添進一郎に従学したとされる。一見、翰の学問上の師は竹添であるが、では二十歳以前は誰に漢学を学んだのだろうか。高野静子は翰の学問的早熟について、「翰の書籍に対する鋭い勘は父重礼を驚嘆させ、天才だ、神童だと吹聴することになった」と述べている(注82)。ここから、重礼が早くから翰に漢学の手ほどきを行ったことが推察される。『古文旧書考』には、重礼から聞いたことばとして、「書は旧鈔本及び宋本を第一と為す」という版本観が引かれている(注83)。おそらく翰の学問的基礎は重礼により固められたのである。

重礼から学問の手ほどきを受けた翰は、父を通じて間接的に狩谷等のグループの書誌学や校勘学の影響を受けたと考えるのが自然である。翰が狩谷や海保の学問に敬服し称揚するのは、その影響力の強さを物語っていると言えよう。

以上から、江戸時代、狩谷望之を中心とする書誌学者グループにおいて、早くから『十三経注疏校勘記』が注目されていたことがわかる。書誌学者達は『校勘記』の内容に学問的刺激を受け、校勘に利用すると共にその補

正を始めた。また、彼らには旧鈔本を校勘資料として高く評価する傾向があり、『校勘記』の旧鈔本批判に不満を抱き、反駁を加えて擁護する者もいた。『校勘記』の内容は受容されると同時に、学問的対立も惹起したのである。

如上の書誌学者達の『十三経注疏校勘記』に対する態度には、一見してわかるように『会箋』と共通する要素が認められる。島田翰と狩谷等のグループとの関連性を考えれば、共通性が見えるのは不自然ではない。翰が影響を受けた海保はグループの一員であり、翰自身も狩谷等の学統に属する学者と言ってよいからである。『会箋』における『校勘記』に対する補正・反駁は、実のところ、「狩谷望之を中心とする書誌学者グループにおける、『校勘記』受容と対立」の延長線上のことなのである。

結語

以上、本稿では『会箋』の校勘について『左伝校勘記』との比較検討を行い、島田翰の存在に注目しつつ、その特色や学術史的位置などについて論じた。本稿の所論の概要については、各節の末尾の数段落をみれば理解できると思われるので、ここでは繰り返さない。

最後に『会箋』と清朝考証学の関連性について付言しておく。従来、『会箋』は清代考証学の影響下にあるとされてきた。ただし、両者の関係性には受容以外の要素も存在することに注意しなければならない。『会箋』と阮元主編『十三経注疏校勘記』の間には旧鈔本をめぐる学問的対立が存在し、その対立は校勘における偏向性と密接に関わるものであった。そして、その背景として特定の学者グループの存在があったことは重要である。本稿の考察の結果を踏まえるならば、『会箋』と清代考証学との関係性については、相違点の所在やその背景についての考察も不可欠であろう。

注

（1）『会箋』の先行研究については、孫赫男「竹添光鴻《左氏会箋》研究述要」（『北京大学学報（哲学社会科版）』第四三巻第三期、二〇〇六年）、及び竹内航治『『左氏会箋』の基礎的研究』（平成二十六年［二〇一四］名古屋大学大学院文学研究科学位（課程博士）申請論文）、二一～四二頁を参照。

（2）本稿の所謂「旧鈔本」は日本伝存の漢籍の写本を指す。明治の書誌学者島田翰によれば、旧鈔本は、「有唐鈔本、有淵源於隋唐者、有出於宋・元・明・韓本者」（『古文旧書考』［民友

社、一九〇五年」、巻一、十四葉右）の三種に分類されるという。

（3）書物奉行（紅葉山文庫の管理者）であった近藤重蔵は旧鈔本『春秋経伝集解』について、「皇朝古来経注本単行ス。コレ李唐ノ伝来ニシテ、此金沢本（旧鈔本『集解』を指す）ノコトキ即是ナリ」と述べている。同書が所蔵された紅葉山文庫は一般に公開されておらず、普通の学者が江戸時代に同文庫所蔵の漢籍を閲覧する機会を得ることは稀であった。『集解』の閲覧が困難なことは明治期においても変わらず、竹添は書陵部の蔵書を閲覧して校勘に利用できるのは自分と島田翰だけである、と語ったという。以上については次の著作を参照した。『右文故事』（『近藤正斎全集』第二巻所収、第一書房、一九七六年）、巻二、一三四頁。および水上雅晴「近藤重蔵と清朝乾嘉期の校讐学」（『北海道大学文学研究科紀要』一一七、二〇〇五年）、九四～九五頁。島田翰『古文旧書考』、巻一、一葉右。また、「巻子本」の書誌情報については、次の記事を参照。

http://db.sido.keio.ac.jp/kanseki/T_bib_body.php?no=006680。

（4）帝国学士院「授賞審査要旨」（国立国会図書館所蔵、一九一四年）、五～六頁。原文はカタカナ・漢字混じりで句読点はないが、平仮名に換え句読を施した。

（5）「竹添光鴻《左伝会箋》的解経方法」（張宝三・楊儒賓編『日本漢学研究初探』所収、喜瑪拉雅研究発展基金会、二〇〇二年）、五二～五六頁。

（6）「《左氏会箋》的校勘特点」（『北方論叢』二〇〇五年第一期）。

（7）『左氏会箋』の基礎的研究』、六九～七一頁。

（8）『左氏会箋』の基礎的研究』、三二頁。

（9）管見によれば、この領域での専論は次の四篇があるに過ぎない。岡村繁「竹添井井の『左氏会箋』が剽窃した一つの種本」（『漢語・漢文の世界』所収、渓水社、一九八四年）。柳本実「「左氏会箋」と「左伝纘考」について」（『東方』五十八号、一九八六年）。『左氏会箋』の基礎的研究』、七五～一一四頁。孫赫男「日本明治時期《左伝》学及其特徴――以《左伝輯釈》与《左氏会箋》対比研究為中心」（『北方論叢』二〇一二年第一期）。

（10）「竹添光鴻《左伝会箋》的解経方法」、六〇頁。孫赫男「竹添光鴻《左氏会箋》与清代考据学関係考述」（『学術交流』二〇〇九年第四期）、一七三頁。

（11）『会箋』（明治講学会、一九〇三～一九〇四年）、自序、二葉左。原文では「阮」字を異体字（「元」の右旁に「阝」）で表記する。なお、明治講学会本は、普通の線装本と異なり、葉数が版心ではなく後半葉に付されているため、原典の確認には注意が必要である。

（12）『十三経注疏校勘記』は一般に阮元の著作と見做されている。しかし実際は段玉裁を総纂とし、主として七名の学者を

分校者とした共同著作である。阮元・段玉裁、および分校者がどのように参与したのか、という問題については、現在研究が進められており、単純に阮元を著者であると断言することはできない。そこで本稿では「阮元主編」と表記する。『校勘記』編纂に関する問題については、水上雅晴「顧広圻与《十三経注疏校勘記》――以《毛詩釈文校勘記》為考察中心」（劉玉才・水上雅晴主編『経典与校勘論叢』所収、北京大学出版社、二〇一五年）、二四二～二四八頁を参照。

(13) 王章濤『阮元年譜』（黄山書社、二〇〇三年）、四〇九～四一〇頁。

(14) 上野賢知「左氏会箋三稿」（『春秋左氏伝雑考』所収、『東洋文化研究所紀要』第二輯、一九五九年）、一二一頁。島田翰の伝記については、高野静子「小伝　鬼才の書誌学者　島田翰」（『続　蘇峰とその時代』所収、徳富蘇峰記念館、二〇〇二年）に詳しい。

(15) 『古文旧書考』（民友社、一九〇五年）、巻四、一葉左。

(16) 明治講学会本は「国立国会図書館デジタルコレクション」（http://dl.ndl.go.jp）で公開されており、現在最も閲覧が容易なテキストである。

(17) 『会箋』、昭五第二十四、七葉左に、「阮氏校勘記」の五字が見えるが、これは竹添自身が『校勘記』を取り上げたわけではなく、実は兪樾『群経平議』からの引用文中における言及である。

(18) 『会箋』、昭五第二十四、三十六葉右および同、定下第二十八、二十四葉左。

(19) 『春秋左伝注疏』（阮元重刻『十三経注疏』二冊本所収、中華書局、一九八七年）、巻二、一五頁。

(20) 札記が『左伝校勘記』の内容を簡略にして利用する場合もある。例えば、『会箋』における「爾貢苞茅不入」についての札記（僖上第五、九葉右）と『左伝校勘記』（巻九百五十九、五葉右）を参照。

(21) 段玉裁『説文解字注』（藝文印書館、一九七九年）、十一篇下、三葉左。

(22) 段玉裁は「今『易』作『荒』」（『説文解字注』、十一篇下、三葉左）と云う。

(23) 『春秋左伝注疏』、巻十六、一二二頁。

(24) 『左伝校勘記』、巻九百六十一、三葉右。

(25) 『会箋』、僖下第七、八葉右。

(26) 山井鼎・荻生観『七経孟子考文補遺』（国立公文書館所蔵享保十六年［一七三一］刊本）、第十八冊、左伝巻五十九、二葉左。

(27) 中華書局標点本『史記』斉太公世家では、「子芒盈」ではなく、「芒子盈」に作る（一五一〇頁を参照）。これは『会箋』が引用を誤ったわけではなく、「子芒盈」に作るテキストも存在する。例えば滝川亀太郎『史記会注考証』（巻三十二、五七

頁）では巻子本同様、「子芒盈」に作る。

（28）『考文』の中国の校勘学への影響については、狩野直喜「山井鼎と七経孟子考文補遺」（『内藤博士還暦祝賀支那学論叢』所収、弘文堂書房、一九二六年）を参照。

（29）『七経孟子考文補遺』に、「有曰古本者、亦足利学所蔵書写本也」（第一冊、凡例、三葉左）とある。足利学校については川瀬一馬『足利学校の研究』（大日本雄辯会講談社、一九四八年）を参照。

（30）荻生双松「七経孟子攷文叙」、『七経孟子考文補遺』、第一冊、序、九葉右～同左。

（31）なお、足利学校所蔵の旧鈔本が全て唐代以前のテキストに由来するとされるわけではない。長沢規矩也・川瀬一馬『足利学校貴重特別書目解題』（『長沢規矩也著作集』第四巻所収、汲古書院、一九八三年）によれば、鈔本には宋本を書写したものもあり、また、その由来が明確ではないものも多いようである。

（32）「語已」とは「語尾」のこと。王利器『顔氏家訓集解（増補本）』（中華書局、二〇〇二年）、四三七頁を参照。

（33）凡例以外の箇所においても、同様の批判は見える。例えば『尚書注疏校勘記』巻八百二十一、七葉左。『左伝校勘記』巻九百四十九、三葉左を参照。

（34）『足利学校の研究』、三〇五～三五八頁。また、『足利学校貴重特別書目解題』を参照。

（35）藤塚鄰『論語総説』（国書刊行会、一九八八年）、一九四～一九五頁。

（36）陳狆「竹添井井『左氏会箋』の序文にみえる「剽窃」――島田翰「左氏会箋提要十二編」の行方について――」、『中国中世文学研究』第六三・六四合併号、二〇一四年を参照。

（37）『古文旧書考』、巻一、五十五葉左～五十七葉右。

（38）『古文旧書考』、巻一、十四葉右。

（39）『古文旧書考』、巻四、一葉左。

（40）『続修四庫全書』第一一四九冊（上海古籍出版社、一九九七年）所収『抱経堂叢書』本からの引用。

（41）野間文史「広島大学蔵旧鈔本『周易正義』攷附校勘記」（『広島大学文学部紀要』第五五巻特輯号一、一九九五年）、一七頁。

（42）海保元起『漁村海保府君年譜』（『海保漁村先生年譜附論誤駁異』所収、漁村先生記念会、一九三八年）、三五頁。海保の参照した単疏本については、「広島大学蔵旧鈔本『周易正義』攷附校勘記」、一七～一九頁にも説明がある。

（43）本稿では『挙正』からの引用の底本として、劉玉才・水上雅晴主編『経典与校勘論叢』所収のものを用いる。

（44）呉偉明「従海保漁村的《周易校勘記挙正》看徳川校勘学的特色」、『国際漢学研究通訊』第八期、二〇一四年）、一七七頁を参照。

(45) 巻一、二十七葉右～二十九葉左。島田翰は引用の後、「右一篇、海保漁邨『周易校勘記挙正』全文」と述べている。しかし実際に現在見られる『挙正』と比較すると、翰の引用は量的に半分以下である。また、現行本の『挙正』は、海保の参照した単疏本が大永年間の鈔本であることについて言及していない。後述するように島田家には海保没後にその著作が寄贈されており、翰が閲覧した『挙正』は実は現行本と異なる稿本であった可能性がある。

(46)『古文旧書考』、巻一、二十九葉左。

(47)『古文旧書考』、巻三、四十八葉左。

(48)『古文旧書考』、巻三、四十八葉右。

(49)『古文旧書考』、巻三、四十九葉左。

(50) 近藤の学術と清代学術との関連性については、「近藤重蔵と清朝乾嘉期の校讐学」を参照。同論文によれば、『校勘記』が日本に輸入されたのは、「文政元年（一八一八）かそれより少し前」（一二六頁）である。

(51)『正斎書籍考』（『近藤正斎全集』第二巻所収、第一書房、一九七六年）、巻一、二七頁。

(52)「近藤重蔵と清朝乾嘉期の校讐学」、一〇六頁～一一二頁。

(53)「近藤重蔵と清朝乾嘉期の校讐学」、一一九～一二三頁。

(54)『正斎書籍考』、凡例、五頁。

(55) 藤山和子「江戸後期の考証学者と段玉裁の『説文解字注』」（『大妻比較文化：大妻女子大学比較文化学部紀要』四、二〇〇三年）、一〇八～一〇七頁。

(56)『淮南子疏証』（国立国会図書館所蔵、鈔本）、第一冊、「本処榛巣水居窟穴」条。同『詅癡符』（国立国会図書館所蔵、鈔本）、第二二冊、第一七条。

(57) 王章濤『阮元年譜』、八二三頁。

(58) 松崎復『慊堂日歴』（『日本藝林叢書』第十一冊所収、鳳出版、一九七二年）、天保五年（一八三四）、十二月晦、七六四頁。

(59) 川瀬一馬『足利学校の研究』、二八九頁を参照。

(60) 尾崎康「群書治要とその現存本」（『斯道文庫論集』第二十五輯、一九九一年）、一七〇頁。

(61) 榎一雄「岡本保孝のこと（下）」（『東洋文庫書報』第九号、一九七八年）、二一頁。

(62) 木村正辞「日本古代字書の説」（『東京学士会院雑誌』第十九編之十、一八九七年）、四一八頁。

(63) 阿部隆一『増訂 中国訪書志』（汲古書院、一九八三年）、第一篇、八頁を参照。

(64)『詅癡符』第二十一冊、第十八条。

(65)『慊堂全集』（『崇文叢書』第一輯所収）、巻十三、十六葉左～十八葉左。

(66)『縮刻唐石経』の完成と刊行年については、劉玉才「松崎慊堂与《縮刻唐石経》芻議」（『嶺南学報』二〇一五年第一期）、

二五六頁を参照。

(67) 六篇の『校譌』は、『唐石経校譌』と題して、劉玉才・水上雅晴主編『経典与校勘論叢』（北京大学出版社、二〇一五年）に収録されている。以下における『考譌』の引用は、『経典与校勘論叢』所収のものを底本とする。また、『校譌』の校勘の実例については、吉田篤志「松崎慊堂の校勘学――三経三伝校譌について――」（『大倉山論集』第二六集、一九八九年）が検討を加えている。

(68) 松崎が引用する所の古籍、あるいは所引の中国の学者の文中に「古本」という字句が見えることもある。それらは日本の旧鈔本を意味しないため、統計には入れていない。また、『左氏経伝校譌』にも「古本」を参照する記述があるが、これらは『考文』の所謂「古本」ではなく、松崎が「石経補欠所採本」として用いた『左伝』の「古版」を指すものと思われる。「古版」については「松崎慊堂与《縮刻唐石経》勠議」、二五五頁を参照。なお、『考文』凡例によれば、該書の『春秋左氏伝』の校勘に「古本」は参照されていない。

(69) 『考文』所引の古本と合致しないのは、「公徳明」の条（『尚書校譌』、四三二頁）、「十篇卅七章」の条（『毛詩校譌』、四三九頁）の二箇所のみである。

(70) 『考譌』の校本と校勘理念については、「松崎慊堂与《縮刻唐石経》勠議」、二五四～二五五頁を参照。

(71) 「日本書誌学史」（『長沢規矩也著作集』第四巻所収、汲古書院、一九八三年）、一〇六頁。

(72) 長沢規矩也「『経籍訪古志』考」（『長沢規矩也著作集』第二巻所収、汲古書院、一九八二年）、一六七～一七五頁。町泉寿郎「小島宝素・海保漁村の天保十三年の京都訪書行――『経籍訪古志』成立の一過程――」（『東方学』第九六輯、一九九八年）。

(73) 『経籍訪古志』（『解題叢書』所収、国書刊行会、一九一六年）、巻一、三頁。

(74) 『経籍訪古志』、巻一、二頁。

(75) 渋江全善・森立之『経籍訪古志』（『解題叢書』所収、国書刊行会、一九一六年）、巻一、二頁。

(76) 両者の関係については、鈴木瑞枝『松崎慊堂　その生涯と彼をめぐる人びと』（研文出版、二〇〇二年）、二九四頁および三七三頁を参照。

(77) 『古文旧書考』、巻一、二葉左。同巻一、四葉左。

(78) 『古文旧書考』、巻一、十三葉右。

(79) 島田重礼「校勘之学」（『東京学士会院雑誌』第二十編之四、一八九八年）、一七三頁。

(80) 「校勘之学」、一七五頁。

(81) 「校勘之学」、一七三～一七四頁。

(82) 「小伝　鬼才の書誌学者　島田翰」、三〇〇頁。

（83）『古文旧書考』、巻四、一葉右。

【附記】本論文は二〇一二年度台湾国科会専題研究計画「《左氏会箋》的校勘之特点与其定位――与《十三経注疏校勘記》的比較為中心――」（NSC101-2410-H-224-031-）による研究成果の一部である。